

ドイツとオリンピック

オリンピック大会が政治に影響される面があることは常です。どの国も自国の選手を表彰台で見たいものですし、国歌を聞きたいもので、その感情はごく自然なことでしょう。しかし、自然でなかったと言えるのは、冷戦中、西ドイツと東ドイツがスポーツ分野で激しく競っていたという歴史です。1964年までは2つの国で1つの選手団しか派遣できませんでした。これは選手たちにとっては酷なことでした。予選会の数も多く、オリンピックでどちらの国の国歌を流すか、ユニフォームを提供するのはどちらの国か、どちらの国の国旗を持っていくかなど、争いが絶えませんでした。1968年になって、東ドイツは独自の選手団を派遣することができ、自国の優秀な選手の活躍を世界に知らせようとなりました。当時は、優秀なスポーツ選手を輩出できる国が、国としても優秀だという考え方があったのです。1972年にミュンヘンで開催されたオリンピック大会では、東ドイツの目的はただひとつ。政治的敵国（西ドイツ）の領土内でよりよい評価を得る、というものです。両陣営ともお互いを意識していたため、様々な“武装”がなされました。ドーピングも導入されました。東ドイツは西ドイツよりも、体系的・効果的に組織されていました。子どもたちに競争させて良い選手を輩出する制度、名付けて「スポーツアカデミー」が組織され、優秀な若者を育成するための特別な体育学校も設立されていたのです。

ミュンヘンオリンピックでの東ドイツの成績は全体の第3位。西ドイツは4位でした。それ以降も、東ドイツはオリンピック大会の度にトップ3に入り続け、西ドイツはそのすぐ後ろの順位となりました。1990年に再統一したドイツは1992年の大会で再び単一のチームを編成しました。しかしそれ以来、ドイツの戦績は優れず、悪くなる一方です。2012年のロンドン夏季大会と2014年のソチ冬季大会では6位がやっとでした。皮肉なことですが、政治に端を発する東西の異常な競争がなくなったことも、成績後退の一因でしょう。また現在では、スポーツに充てられる予算も減少し、スポーツ振興組織とスポーツ教育組織の関係も、明らかに悪化しています。

政治が、どれほどスポーツを自分たちのために利用しているかは、ボイコットなどの議論が交わされる度に見て取ることができるでしょう。1980年と1984年のオリンピックでも、残念なことに政治的ボイコットがありました。2020年の東京大会ではどの国・地域の選手団も欠けることなく、日本もドイツも、躍進してくれることを願いたいものです。